＜実践・事例報告＞

東日本大震災後行われた移動図書館活動から見えた「図書館」の持つ力
－走れ東北！移動図書館プロジェクトを事例に－

鎌倉　幸子

自然災害は，図書館の利用が困難となってしまった人を生み出す。今回の震災は千年に一度の大型震災といわれているが，頻繁に自然災害が猛威をふるう日本では，どこでも図書館利用に障害が生まれる可能性があるともいえる。シャンティ国際ボランティア会は，東日本大震災後に移動図書館プロジェクトを立ち上げ，現在 46 カ所の仮設住宅を巡回している。ゼロから移動図書館プロジェクトの立ち上げ方と本や図書館の持つ力についてまとめたものである。

はじめに

シャンティ国際ボランティア会（以下，シャンティ）は 1981 年にカンボジア難民支援の活動のために設立された NGO である。内戦の戦火を逃れ，命からがら国境を越え隣国タイにある難民キャンプにたどり着いたカンボジア人に，衣食住の支援が求められていた。しかし，国連などによる食料などの支援を受けても心に傷を抱えた子ども達は，難民キャンプの隅で笑うことどころか泣くことも忘れたように表情なくうなだれていた。また 1975～79 年まで続いたポル・ポト政権下では，焚書坑儒の政策が取られ，多くの書物が焼き払われてしまった。そこで，シャンティは現存していた図書を復刻し，難民キャンプの中に図書館を建設し，また図書館から離れた場所へは移動図書館を実施した。

現在は活動地を広げ，カンボジア，ラオス，タイ国内にあるミャンマー（ビルマ）難民キャンプ，ミャンマー，アフガニスタンで読書推進，図書館事業を中心とした教育支援を行っている。また，東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県，宮城県，福島県で仮設住宅を巡回する移動図書館を展開しており，2015 年も継続していく計画である。

本稿では，アジアでの図書館事業の経験を生かし，東日本大震災後の東北でどのように移動図書館のプログラムが形成されたかをまとめていく。本の貸し出しを通して見えてきた住民が抱える課題とそれに向き合ことができる図書館や本の力について提起する。

1. 東日本大震災と岩手県の図書館の被害状況

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では，死者 19,074 人，行方不明者 2,633 人，全壊した家屋は 127,361 棟，半壊 273,268 棟と甚大な被害をもたらした [1]。また，図書館を含む公共施設も壊滅的な状況になった市町もある。震災直後から行った活動と，岩手県における図書館の被害状況について述べる。

1.1 震災直後の活動

シャンティは翌日 3 月 12 日には緊急救援の支援実施を決定した。3 月 15 日よりスタッフが現場入りした。宮城県気仙沼市に拠点を構え，避難所を回り，物資配布，炊き出し，家の周りの片付けなどベーシック・ヒューマン・ニーズを支えるための活動を行った。また，過去に起こった震災の現場で経験のあるスタッフが全国から集まるボランティアと，地元のニーズをマッチングさせるための拠点となる気仙

2015 年 1 月 10 日受理
かまくら　さちこ
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

沼市ボランティアセンター立ち上げを支援した。

1.2 避難所から仮設住宅へ

時間が経てばニーズも変わってくる。支援活動も状況に合わせて組み立てなおさなければならない。2011 年 4 月 26 日，主要なスタッフが集まり今後について話し合う場を持ち，人々が避難所から仮設住宅に移った後にどのような活動を行うべきかを議論した。5 月に岩手県と宮城県でプロジェクト形成の調査をすることになった。著者は岩手県の担当となった。岩手県立図書館の震災関連のサイト[2]で掲示されていた図書館の被害状況を把握し，実際，その現場に足を運び状況を確認していった。また，避難所を回りヒアリングを行った。

1.3 図書館の被害状況

5 月の調査で訪れた図書館の状況は表 1 の通りである。また，図書館だけではなく，書店も同様な被害を受けていた。これからの生活のために必要な情報や心を安らげるためにも，本が必要とされることが予想される中,「本を手にする文化を途切れさせないお手伝い」をするために立ち上げたのが移動図書館の活動であった。

表 1　岩手県における図書館の被害状況

図書館名	人的	建物	設備
山田町立図書館	1 名死亡（非番）	大きな被害はなし	図書散乱，図書 30,000 冊流出
大槌町立図書館	なし	壊滅状態	把握不能
大船渡市立三陸公民館図書館	なし	津波の被害に遭い，骨組みしか残らず	全て流出
陸前高田市立図書館	全員行方不明または死亡	壊滅状態	把握不能

（出典）岩手県立図書館. “東北地方太平洋沖地震に係る岩手県内公立図書館等の被害概況”2012 年 10 月. http://www.library.pref.iwate.jp/0311jisin/lib-iwate.html (参照 2015-01-04).

2. 移動図書館プロジェクトの形成

避難所には支援物資として大量の本が届いていた。しかし，マッチングがされないと読みたい人に読みたい本が届かない現実があった。とある避難所では，代表の男性が「この避難所には小さい子どもがいないのに児童書と絵本が届いた。子どもがいる避難所に持っていって欲しい」と段ボール 2 箱を渡してくれた。また，別の避難所では「あの段ボールに読みたい本が入っているのだが，怖くて手が出せない」とつぶやく方がいた。避難所に届いたものなのか，個人宛に届いたものなのか分からないとむやみに手を出せないということである。誰かが箱から本を出して，机に並べて，模造紙 1 枚にでも借り方のルールを書いてくれたら本を手に取れるのに，という声もあった。読みたい人がいて，読みたい本は存在した。しかし，本が人の手に渡るためには「人」を介す必要があった。

東京に戻り，知人に移動図書館の立ち上げについて話をすると「図書館ではなく，本を配布してはどうか」という意見をもらった。しかし,「図書館という形がよい」という声を，岩手県の方たちからいただくことが多かった。仮設住宅は 4 畳半～6 畳 2 間に 1 家族が住んでいる。冬服と夏服，また布団を置く場所もない状況下で，本を増やせないという現状があった。また「子どもたちを非日常から日常に戻したい」という声もあった。これは岩手県の大人たちからの「子どもが支援物資をもらって当たり前となってしまうのが怖い」という切実な訴えであった。「借りたものは返す」「皆のものは大切に使う」という図書館の場では，子どもたちを日常に戻す訓練ができることから,「本の配布ではなく図書館を」というリクエストがあがったと考えられる。

車も津波で流されてしまった人もたくさんいた。また，建設予定の仮設住宅は津波の来ない場所に作られたため，町の中心から 20 キロ以上離れた山の上にあるケースもあった。バスが運行されるとはいえ，1 日に数本のみである。仮設住宅に住む人たちがどこかに出向いてもらうより，こちらから出向いていくスタイルを取ろうと移動図書館のプロジェクトを実施することになった。

2.1 図書館を作る 4 つの要素

シャンティには「図書館を作る 4 つの要素」とい

う概念がある。海外での図書館事業の経験から得られたものであり，岩手県での移動図書館の立ち上げの際もこの視点を基に組み立てた。4 つの要素は，①図書スペース，②本，③図書館員，④利用者から成っている。

2.2.1 図書スペース

図書館ではなく図書スペースとしたのは，建物や部屋がなくても木や屋根の下といった少しのスペースがあれば本を手にする空間は作れるからである。

仮設住宅団地の駐車場を移動図書館のステーションにした。また本と人をつなぐだけではなく，人と人とも集える場所にしたいという願いから，車の後ろにイベントテントを張り，長机と丸椅子を置いた。その場で本を読んだり，おしゃべりができる空間を作った。雨や雪の日は，仮設住宅にある集会場を使わせてもらっている。

2011 年の活動開始時は車が入手できず，軽トラックに本棚を載せたもので巡回していたが，現在では移動図書館車 5 台が，東北 3 県を走っている。移動図書館は，大阪府の枚方市寄贈の他，日産自動車など企業からの支援で新車を改造することができた。各移動図書館には 1,500～3,000 冊の本を積むことができる。

2.2.2 本

5 月 13 日の理事会で移動図書館のプロジェクトが承認されてから，7 月 17 日の初運行日までに本をそろえる必要があった。2 カ月の間に倉庫に 2 万冊の蔵書を置くことを目標とした。

調査の際に，長年読み聞かせをしていた宮城県気仙沼市の図書館員の方が，絵本を選ぶのが難しいという話をされていた。全国から絵本の支援が届いたが，送り主が配慮してか水がでてくる物語は除かれていた。ただ，津波が原因で起こった大火事を目にした子どもたちは，水もそうだが火にも恐怖心を抱いていた。また，震災直後の 4 月から沿岸部に移動図書館車を走らせていた岩手県滝沢村（現在，滝沢市）の図書館員から「人が亡くなる話は辛いだろうと思って持ってきていなかったけど，サスペンス物のリクエストが来る」という話もいただいた。こちらが意識して避けているものが，受け入れられていたり，逆に大丈夫かと思っていたものが避けられていた。そこで，最初は絵本，児童書から小説，エッセー，実用書，漫画までさまざまなジャンルの本を取り揃えることにした。出版関係の団体・企業が震災後立ち上げた＜大震災＞出版対策本部から新しい本の寄贈を受けたり，ブックオフオンラインから購入したりと新品に近い本をそろえていった。絵本や児童書は岩手県で活動していた「3.11 絵本プロジェクトいわて」から寄贈していただいた。

活動が知られるようになると本を寄贈したいという連絡が事務所に入るようになる。ただ，被災地に届いた支援物資としての本を見ると，古く，中にはカビが生えていたものもあった。家にある読まなくなった本を片付ける目的で送るのは本末転倒である。クリスマスや誕生日など家族や友人などにプレゼントをする時は，その人を思いながら選ぶように，本も思いをこめて送ってもらいたいと考えた。そこで「大好きな本は自分のそばに，もう一冊を岩手に」と題し，自分が大好きな本，辛い時に励まされた本，元気になれた本，思い出の本を一冊購入して送ってもらうようにお願いした。

2012 年に入ると被害を受けた書店がプレハブ商店街などで再開するようになった。また岩手県の図書館員から「図書館の役割の一つに，地元の書店の保護がある」というアドバイスを頂戴した。現在では，リクエストをいただいた本は原則，地元の書店で購入している。

また，これからの生活に必要とされるであろう情報は何かをスタッフで考え，蔵書を増やしている。

2.2.3 図書館員

東京から所長が一人赴任したが，他のスタッフは地元で採用した。また，地元の教育委員会や自治会の代表，知り合いになった地元の方などに募集要項を渡して呼びかけを行った。どんなにたくさんの本をそろえても，立派な移動図書館車を作っても，その場にいるスタッフが不機嫌な対応をしていたら誰も近寄ってくれないであろう。

本や図書館に関心があることはもちろん，人と接することが好きなスタッフを採用した。

2.2.4 利用者

スペースを作り，本を置いて，図書館員を配置しても，利用者が来なければ意味をなさない。利用してもらうためにはどのような取り組みをするべきかを考えるようにした。

移動図書館の各ステーションには 2 週間に一度お伺いしている。滞在時間は 1 時間と長めに組んでいる。利用者には本の貸し借りだけではなく，おしゃべりを楽しみたいという思いもあった。仮設住宅は狭いので，知り合いを家に上げるのをためらわれる

方がいらっしゃった。知り合いとの待ち合わせや歓談を移動図書館の場で行いたいという声があった。また，高齢者が多く規模が大きい仮設住宅だと家から移動図書館の場所まで来るために時間がかかる。そのような状況から滞在時間を決めた。

「立ち読み，お茶のみ，おたのしみ」というキャッチコピーをつけた。「立ち読み」は一人で行うイメージである。とある男性が，人が集まっておしゃべりをしているところに入り込むのは辛いけど，ここは立ち読みができるから居心地がよいといっていた。「お茶のみ」は皆でワイワイ楽しむ雰囲気がある言葉である。一人でも，皆でも，自分のその日の気持ちに合わせて楽しんでくださいという思いを込めた。2011 年 7 月に移動図書館に本を借りに出てこられた方が，知り合いとばったり会って「あぁ，生きていたんだ」と再開の場にもなっていた。また，鍋料理の本を読んでいる人を見て「あ，今日はどの鍋料理を作るの」と会話の糸口にもなっていた。

一人でも，皆でも楽しめる場所が「図書館」である。

2.2.5 現在の運行場所と貸出数

2011 年 7 月に岩手県陸前高田市，大船渡市，大槌町，山田町でスタートした移動図書館だが，2012 年より宮城県山元町，福島県南相馬市での運行も開始した。現在では 46 の仮設住宅団地を巡回している。

岩手県の移動図書館活動の実績で見ると，2011 年 7 月から 2013 年 12 月末までに 11,324 人の利用者があり，60,884 冊の本が貸し出された [3]。

3. どんな本がなぜ読まれたか

本は生活に必要な情報や自分の感情を引き出してくれる言葉を伝えてくれる。本の主人公に照らし合わせて，困難を乗り越える希望を与えてくれる。

移動図書館で借りられた本をエピソードとともに紹介する。

3.1 育児書

2011 年秋に，生後数週間の子どもをつれた母親が育児書を探しに来た。震災前に通っていた産婦人科で一緒だった友人も，どこに住んでいるのか，生きているのかも分からない。親も遠くの仮設住宅に住むことになったので，育児の補助を頼めない。また相談する相手もいない。町の図書館や書店は津波の被害にあい再開していなかった。車で数十キロ行った町には書店があるが，小さい子どもをつれてそこまで移動することはできない。移動図書館が唯一本を手にできる場所であった。

また，赤ちゃんを連れた別の女性と移動図書館の場で友達になる光景も見られた。本が人と人とをつないだ実例であった。

3.2 編み物の本，園芸の本

「手を動かさないと，悪いことを思い出してしまう」とクラフト，園芸，編み物の本が飛ぶように借りられた。また，借りた方の中には「本を読むとぐっすり眠れる」という声もあった。

震災ですべてが破壊され，自分の無力を感じる中，編み物をしたり植物を育てることで，「まだ自分は何かを生み出せる力がある」と感じられ，自信につながると言っていた。

3.3 料理の本

「あれだけ毎日料理を作っていたのに，3 ヵ月間も炊き出しを受けると手が思うように動かない。だから料理の本を読んでもう一度習慣を取り戻したい」と一人の女性がため息交じりに話をしていた。料理をしなくなると出来合いのお惣菜で済ませてしまうことも多くなり，健康の維持も心配ごとになっていた。

また，震災でご家族を亡くした方は，「作ったことのない料理を作らないといけなくなった」と料理の本を借りられることもある。手に入る野菜や食材も限られていたり，仮設住宅の台所が狭いため今まで使っていたオーブン等の大き目の機材も購入を控える方もいる。そのためフライパン一つでできる料理の本なども借りられていった。

3.4 大活字本

目が不自由な方や高齢者の方からリクエストがある。大活字本は通常の文庫より大きく重い。そのため，大活字本を借りて，長い時間，持ち運ぶのは大変という声も聞かれた。住居のそばに来る移動図書館だとその負担が軽減できる。

3.5 地図帳や旅行ガイド

字を読むのは辛いけど，きれいな写真を見るだけで気分が軽くなるということで旅行ガイドや地図が借りられていった。

また,「全国から来てくれたボランティアがどこから来たか知りたい」という理由を挙げた方もいた。自分の生活が落ち着いたら，ボランティアが着てくれた町に行き，観光をし，お礼を言いたいという思いをもたれていた。

3.6 住宅の本, 法律の本

「これからどこにどのように住むのか」が一番の懸念すべき事項となっている。引っ越しのシミュレーションのために間取りの本など住宅関連の本のニーズが高い。また，土地に関わる法律などの本も「知りたい」に答えるものとなっている。

3.7 新しい生活のために

仮設住宅に住んでいる方は，もともと海沿いに暮らしていた。山の中にある仮設住宅に移り，初めて山の生活をせねばいけない状況になる。仮設住宅の解消がまだ見えない中で，山での生活を少しでも楽しもうと，野鳥，川釣り，山菜取りなどの本が借りられる。

4. 無縁社会と図書館～日本社会が直面する課題に向き合う

長期化する仮設住宅暮らし，空き室が増えてきた仮設団地に取り残される不安，今も安定しない原発など，その土地に暮らす人々の悩みは増している。

シャンティが移動図書館活動を行っている宮城県山元町の住民の方が「被災地は，今がいちばん，気持ちを強く持たないとダメだと思えます。再建や新しい挑戦はパワーがいります。これから2年のハード整備が完了する期間が,一番不安で揺れ動く時期」とおっしゃっていた。東北の復興はまだ終わっていないどころか,スタートラインすらも見えていない。

災害公営住宅などへの引っ越しが本格化する中で,仮設団地では高齢者や障がい者の孤立化が心配されている。シャンティは移動図書館活動を 2015 年も継続し，仮設団地を中心に利用者が本を通じて安らぎや心地よい刺激を得たり，生きていくうえで必要な情報を入手したりできる，そのお役に立つことに力を注いでいく。ストレスケア，子ども支援なども念頭に置きつつ，自由に交流できる心のよりどころづくりを目指している。

講演をすると「移動図書館が居場所になっていますね」「図書館から出て人とつながっていくことは大切だと思います」という声をいただく。中央館や分館が設置された後，移動図書館を廃止する自治体もある。しかし，今だからこそ移動図書館に役割があるのではと考える。

震災前の 2010 年に NHK が制作・放送した「無縁社会」という番組では，人と人との関係が希薄になっていく日本社会へ警告を鳴らしていた。これからも高齢者の一人暮らしは増えていくことになるだろう。介護が必要な人，また介護をしている家族，小さい子どもを持っているお母さんや妊婦こそ，外に出るのが困難で社会との接点が希薄になっているのではないか。図書館利用が困難な人こそ，病気の情報，闘病生活の本，子育てに関連する本など「情報」を必要としている。こちらから「届けていく」移動図書館は，それらの方との接触を可能とする。

神戸新聞によると1995年から2000年まであった仮設住宅での孤独死は233 人。その後震災復興住宅に移りながらも亡くなった方は 824 人と，2013 年には 1,000 人をこえたと発表があった [4]。「なぜ地震で助かってしまったんだろう」と孤独に打ちのめされ嘆く方もいると聞く。神戸の悲しみを教訓に変え，東北に生かせるのか。

2011 年に叫ばれた「絆」は，口先だけなのか，形になるのか。今まさに，私たちに問われている。

おわりに

2014 年は火山の噴火や土砂災害など自然災害が牙をむいた年であった。震災は二度と起こって欲しくないと願いながらも，災害と向き合い共存し生きていかなければならない日本において，過去の経験を教訓として生かすか否かが問われている。自然災害は，図書館の利用が困難となってしまった人を生み出す。今回の震災は千年に一度の大型震災といわれているが，頻繁に自然災害が猛威をふるう日本では，どこでも図書館利用に障害が生まれる可能性があるともいえる。

シャンティの移動図書館プロジェクト形成や運営のノウハウも，今後震災などで公共施設が被害を受けながらも，住民により図書館や本へのニーズが浮上した時に役立てられることを願ってやまない。

“本を開くことは，未来を拓くこと。”本を手にすることは，人間が平等に与えられるべき権利だと信じ,2015 年も東北での移動図書館の活動を継続していく。

注・引用文献

1) 消防庁災害対策本部.「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について（第 150 報）」 2014 年 9 月 10 日.
http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/150.pdf (参照 2015-01-04).
2) 岩手県立図書館.「東北地方太平洋沖地震に係る岩手県内公立図書館等の被害概況」2012 年 10 月.
http://www.library.pref.iwate.jp/0311jisin/lib-iwate.html (参照 2015-01-04).
3) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会.「東北に、よりそって。」 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会, 2014, 18p.
4)「独居死 20 年で 1000 人超す　阪神・淡路大震災仮設、復興住宅で」神戸新聞, 2015 年 1 月 10 日.
https://www.kobe-np.co.jp/news/shakai/201501/0007646065.shtml (参照 2015-01-10).